

テサロニケ人への手紙4章 「神に喜ばれる歩み」

1A からだの聖さ 1-8

1B 使徒たちから学んだ歩み 1-2

2B 淫らな行い 3-8

2A 兄弟愛 9-12

1B ますます豊かな愛 9-10

2B 落ち着いた生活 11-12

3A 眠った人についての慰め 13-18

1B 復活 13-15

2B 携挙 16-18

本文

テサロニケ人への手紙第一4章を開いてください。私たちはこれまで、パウロがテサロニケの信者たちのことを思い起こしていた文章を読んでいました。彼らのために祈り、彼らとその愛と信仰において人々の評判が立っていたことを伝え、そして彼らに対してパウロたちがどのようにふるまったかを思い起こさせていました。そして、彼らがいかに、神のみことばを受け入れたかを思い起こしています。それから、サタンの誘惑によって彼らの信仰が台無しになってしまうのではないかと気が気でならなかったのですが、テモテを遣わし、彼らがしっかりと主に堅く立っているのを知って、生き返った思いがしました。そして、彼らのために改めて祈りました。

その祈りの中で、3章の終わりでこのように言います。「3:13 私たちの主イエスがご自分のすべての聖徒たちとともに来られるときに、私たちの父である神の御前で、聖であり、責められるところのない者としてくださいますように。」主が、聖徒たちと共に来られます。聖徒たちとは、すでに天に召された信仰者たちです。彼らが聖なる者たちです。その中に自分たちも加わわる時に、自分たちの父なる神の御前で、聖であり、責められるところのない者としてくださいますように、と祈っています。パウロは、これから、いかにして主に喜ばれる歩みをすることができるのか、いくつかの勧めをしていきます。その中で、聖さを保っていることがみこころであると教えています。

次から見ていく4章は、パウロが、そのまま、「これは神のみこころです」と断言しているものが出てきます。「神のみこころはこうである」とか、「この警告を拒む者は、神を拒むのです」とあるとか、「主のことばによって、あなたに伝えます。」であるとか、私たちの思いや考え、慣わしとかは度外視して、主がこう言われているのです。それが、いかに周りの習慣や文化と相いれなくとも、そうなのです。いかに空想的に聞こえるような話でも、それでも主のことばだから、受け入れなさいという勧めになっています。覚えていますか、2章でパウロたちが、彼らが、自分たちから聞いた言葉を

受け入れたことを話していましたね。「2:13 あなたがたが、私たちから聞いた神のことばを受けるとき、それを人間のことばとしてではなく、事実そのとおり神のことばとして受け入れてくれたからです。この神のことばは、信じているあなたがたのうちに働いています。」神のことばを受け入れる、というのは、そのまま神から聞いて、その命令に従うという類のものだということです。

1A からだの聖さ 1-8

1B 使徒たちから学んだ歩み 1-2

¹最後に兄弟たち。主イエスにあってお願いし、また勧めます。あなたがたは、神に喜ばれるためにどのように歩むべきかを私たちから学び、現にそう歩んでいるのですから、ますますそうしてください。

「最後に」と言っていますが、これは、これまで思い起こしていたことを終えて、これからは勧めます、ということです。その勧めは、「神に喜ばれるためにどのように歩むべきか」ということです。キリスト者が、何かについて、やっていいのか、悪いのか、という問いをする時に、「ぎりぎりまで、世のことをやってみたい。」という思いがあります。そういった歩みではなく、「神に喜ばれることをしたい」という願いから、すべての行動を決めるのです。

そして、それが「私たちから学び、現にそう歩んでいる」と言っています。パウロたちは、彼らのことを「1:6 私たちに、そして主に倣う者になりました。」と言っていました。パウロたちが主に倣っているように、彼らもパウロたちを見て、主に倣っていました。そして、「ますますそうしてください」とのことです。主にあって、あふれるのです。主の聖霊が臨まれた時には、私たちは満たされるだけでなく、その働きをますます聖霊にさせていただくのです。御霊の火を消してはいけません。

² 私たちが主イエスによって、どのような命令をあなたがたに与えたか、あなたがたは知っていません。

ここで、先ほど話しましたように、パウロがこれから伝えるのは、主イエスによる命令です。百人隊長のことを思い出してください。そのしもべが病にかかった時に、「おことばだけ、ください。」と言いましたね。それは命令系統をよく知っているからです。上官の命令には、絶対服従です、同じように、主が、私たちに与えられた聖霊によって教えておられることで、従うものです。

2B 淫らな行い 3-8

³ 神のみこころは、あなたがたが聖なる者となることです。あなたがたが淫らな行いを避け、⁴ 一人ひとりがわきまえて、自分のからだを聖なる尊いものとして保ち、⁵ 神を知らない異邦人のように情欲におぼれず、^{6a} また、そのようなことで、兄弟を踏みつけたり欺いたりしないことです。

「神のみこころ」と、パウロは言っています。しばしば、キリスト者の間では、「神のみこころは何か分からない。神のみこころを知りたい。」という言葉が発します。けれども、それは言い換えると、「目で見えるしるしが欲しい。」と言っているのです。まだ見ていないものを見るようにして歩むのが信仰でありますから、目に見えるしるしと与えられるわけでは、必ずしもありません。何か分からないくとも、それでも主が言われているから行きますというから信仰なのです。

しかし、「神のみこころ」というのは、明らかに示されていることが多いです。もうすでに知らされているのに、それを行っていないことが多いのです。神のみこころを求めるといふのは、もう既に知らされているけれども、それに従っていないことが明らかにされる、ということです。

ここでは、「あなたがたが聖なる者となること」です。聖なる者となることは、聖書をくまなく読んでいるものであれば、分かっていることですよね。けれども、どこかで避けています。キリスト者になることは、いかに幸せに生きるか？円満に生きるか？ということを考えます。しかし、聖なる者となることです。聖なるもの元々の意味は、旧約聖書にある、聖所における祭具なのです。器があっても、それは主のために用いる器であって、一般の用途で使っては決していけません。

そして、「淫らな行いを避け」ることを教えています。淫らな行いとは、ギリシア語では「ポルネイア」であり、ポルノという言葉はここから来ています。性的逸脱のことを話しています。聖書で祝福されている性的行為は、結婚した男女間のものです。それ以外は、すべて淫らな行いであります。ですから、これはかなりの挑戦です。周囲では、あまりにも当たり前に入れられているものも、淫らな行いであって、それらを避けることが神のみこころなのです。

テサロニケ人たちにとって、これがいかに、人間的にはとんでもないことだったのかを想像する必要があります。ローマは、共和国時代は離婚する者が一人もいなかったそうです。帝国になってから、離婚が急増しました。歴代の皇帝は、かなりの割合で、同性愛者が両性愛者でありました。ローマ帝国は、その性道徳の退廃で内側から崩壊したと言われています。そして、ギリシア文化も性道徳は退廃しています。ギリシア神話に出てくる神々そのものが、かなり奔放な者たちであります。神殿礼拝と性的倒錯は一体となっていました。そして男たちは、快樂のために売春婦を、日頃の性欲のためには妾を、相続の子のために妻をと分けていました。これらが悪いことでは全くなく、受け入れられていたのです。

その中で、ユダヤ人は聖なる神を信じていました。しかし彼らにさえ、妥協がありました。妻に気に入らないことがあれば、離婚状を出して、他の女と結婚していました。それでイエス様が、それは姦淫であると正したのです。それで、イエス様が「神が男と女を結び合わせたのだから、それを引き離してはいけない。」と聞いた時に、驚いたのです。それでは、誰が結婚できるのでしょうか？と弟子たちが尋ねたことを思い出してください。主が、神が人を造られた時の元々の姿を基準とし

なさいと命じておられるのです。

そして、「自分のからだを聖なる尊いものとして保ち」と言っていますね。私たちは、心と体を分けてはいけません。心が主に向けられていれば、体で行っていることは関係ないと思ってしまうのですが、イエス様は、心にあることが外に出て人を汚すと言われました。体で行っていることと、心は連動しています。パウロは、こう言いました。「I コリ 6:19-20 あなたがたのからだは、あなたがたのうちにおられる、神から受けた聖霊の宮であり、あなたがたはもはや自分自身のものではありません。あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。ですから、自分のからだをもって神の栄光を現しなさい。」

そして 5 節は、「神を知らない異邦人のように情欲におぼれず」と言っています。先ほど、話したように、彼らの道徳は無感覚になってしまっています。それは神を知らないからです。そして、「兄弟を踏みつけたり欺いたりしないことです」と言っていますが、淫らな行いに関われば、兄弟たちをつまずかせてしまいます。次に、互いに愛し合う、兄弟愛がテサロニケ人たちにはあることをパウロは話しますが、彼らの思いを踏みつけたり、欺いたりしてしまうのです。

^{6b} 私たちが前もってあなたがたに話し、厳しく警告しておいたように、主はこれらすべてのことについて罰を与える方だからです。

パウロは、テサロニケにいたのは非常に短かったのですが、かなりのことを教えていました。淫らな行いについても、厳しく警告していました。聖書から教えていたのですが、イスラエルの民がカナン人を聖絶しなさいと主が命じられたのは、忌まわしいことを彼らが行っていたからです。「レビ 18:24-25 あなたがたは、これらの何によっても身を汚してはならない。わたしがあなたがたの前から追い出そうとしている異邦の民は、これらのすべてのことによって汚れていて、その地も汚れている。それで、わたしはその地をその咎のゆえに罰し、その地はそこに住む者を吐き出す。」パウロは、そのまま、聖なることについての主の教えをまっすぐに教えていたのです。

⁷ 神が私たちが召されたのは、汚れたことを行わせるためではなく、聖さにあずからせるためです。

これを言い換えると、キリストのうちにあるならば新しく造られた者で、古いものは過ぎ去った、ということです。私たちが救われた、召されたのは、聖さにあずかるためです。

アウグスティヌスという人の名前を聞いたことがあると思います。4 世紀から 5 世紀に生きていた、神学者です。彼は、母親がキリスト者であったのに、放蕩息子となり、非常に淫乱な生活を送っていたそうです。しかし、回心しました。ところが、道ばたで昔、付き合っていた彼女に出くわしました。あの、淫乱にふけていた時の彼女です。そして、彼が逃げようにもついてきます。そして、

「私よ〜！」と尋ねます。アウグスティヌスは、応えました。「私は、もう私ではない。」分かりますか、彼はもはや、召しを受けていたのです。古い彼は、もはや彼ではなくなったのです。

⁸ですから、この警告を拒む者は、人を拒むのではなく、あなたがたにご自分の聖霊を与えてくださる神を拒むのです。

こうした警告を発信している時に、必ずものすごい反発がきます。しかし、それは主に与えられた聖霊に反発しているのであり、その人本人に反発しても仕方がないのです。時々、聖書のことを語っている時に、ものすごい反発する人がいます。話し方が良くないとか、言うんですね。そういったことではないのです、その真理がその人の良心に突き刺さっているだけで、聖霊の語りかけを拒んでいるにしか過ぎません。

2A 兄弟愛 9-12

1B ますます豊かな愛 9-10

⁹ 兄弟愛については、あなたがたに書き送る必要がありません。あなたがたこそ、互いに愛し合うことを神から教えられた人たちで、¹⁰ マケドニア全土のすべての兄弟たちに対して、それを実行しているからです。兄弟たち、あなたがたに勧めます。ますます豊かにそれを行いなさい。

パウロは、手紙の冒頭から、彼らが愛の労苦において、マケドニアまたアカヤにまで、信者の模範として響き渡っていると言っていました。このことを、「神から教えられた」人たちだと言っています。イエス様がそう教えておられましたね。そのことを私たちは何度となく聞いています。しかし、その命令に応答しているのかどうかの問題です。彼らは実行していました。そうすると、御霊の流れが起こります。溢れてくださるのです。それが、ますますそれを豊かに行いなさい、ということです。

2B 落ち着いた生活 11-12

¹¹ また、私たちが命じたように、落ち着いた生活をし、自分の仕事に励み、自分の手で働くことを名誉としなさい。¹² 外の人々に対して品位をもって歩み、だれの世話にもならず生活するためです。

テサロニケ人への第二の手紙で、パウロは詳しく、ここで勧めていることについて話しています。何が起きているかと言いますと、テサロニケの人たちは兄弟愛がありました。そして、貧しい兄弟たちに物質的な援助をしていました。ところが、それに、あぐらをかいている者たちがいたのです。それで、パウロは、「落ち着いた生活」をしなさいと言っています。仕事をしていないと、何が起ころか？と言いますと、無駄に考える時間が多くなります。それで、人におせっかいを焼きます。このようにして、兄弟たちの良い働きを台無しにしているのです。教会に対して、ただもらうことばかりを考えて、人々の善意に頼ってばかりいる人っていますね。そういった態度を戒めています。

これでは、外の人々に対して証しになっていません。外の人たちに対して証しになるのは、自活できていることです。静かに働き、しっかり働き、それで経済的に自立していて、人々に仕えることができるようになってきていることです。みなさんが、しっかりと働いていて、人に迷惑をかけていない時に、それ自体が外部の人たちに品位をもって歩んでいることになります。

3A 眠った人についての慰め 13-18

そして次の、主を喜ばすことについての歩みは、「悲しまないで、励まし合う」ということについてです。すでにキリストにあって死んでしまった人々について、確かな希望をもって互いに慰めることです。かなり長い勧めになります。午前礼拝で見たように、主が来られることと、その時に人々が復活することについて、パウロが説明しているからです。

1B 復活 13-15

¹³ 眠っている人たちについては、兄弟たち、あなたがたに知らずにいてほしくありません。あなたがたが、望みのない他の人々のように悲しまないためです。

パウロの初めの勧めは、「あなたがたに知らずにいてほしくありません」であります。知らないでいてほしくない、と使徒パウロがお願いしている箇所が、手紙の中にいくつかあります。ロマ 11 章では、イスラエルの救いについてです(11:25)。ユダヤ人がイエスをメシアと信じ、受け入れなかったために、異邦人に救いが及んだのですが、それだけでないのだよ。異邦人の完成の時には、イスラエルはみな救われるのだ、という話です。そして、第一コリント 12 章では、「御霊の賜物については、私はあなたがたに知らずにいてほしくありません。(1 節)」と言っています。それから、コリント第二 1 章で、「アジアで起こった私たちの苦難について、あなたがたに知らずにいてほしくありません」と言っています(8 節)。キリスト者の受ける苦しみについてですね。そしてここでは、「眠っている人たちについて」です。キリストが天から降りて来られる時に、キリストにある死者がよみがえることです。

そこで、今の教会について考えてみましょう。今、イスラエルの救いについて、教会でどれだけ語られていますか？全世界の人々、つまり異邦人の救いについては良く語られますが、イスラエルの救いはどうでしょうか？知らないままです。ユダヤ人が世界から戻って来て、イスラエルの国が建てられたこと。またユダヤ人の間にイエスを信じる人々が増えていることについて、どれだけ語られているでしょうか？いませんね。そして、御霊の賜物について、知識や知恵のことば、預言、奇跡、癒し、異言などについて、知られていますか？いいえ、異言や預言についての意見が大きく分かれているので、この話題は避けようとしています。それで、あまり語られません。それから、苦しみについては？誰かが苦しむと、決まって、「その人は何かみこころにかなわないことをしたから、そうになっているのだ。」とか、全く、非聖書的な考えが、平気で教会で語られます。苦しみにある、神のみこころについて語られていません。パウロが、知らないでいてほしくありませんとお

願っているところが、見事に知らないでいるのです！

そして、ここです。携挙について、復活について、どれだけ語られているでしょうか？携挙については、いつ主が来られるのか？ということで、キリスト者の中で激しい議論になります。患難前、患難中、患難後に分れます。他にもいろいろあります。それだけでなく、携挙そのものがないという議論が、かなり教会では広がっています。ますます、主が来られることについて語られて行かない風潮があるのです。それは、一部に極端になる人々がいたと言われます。確かに、再臨の日時を定めたり、日頃の生活や教会の営みをやめたりする人々がいました。その反動で、携挙そのものを語らなくなっていったのです。しかし、午前礼拝でしっかりと話しさせていただきました。キリスト者の信仰と愛は、まさに携挙にある希望に支えられているのです！

キリストにあつて死んだ人々を、ここでパウロは、「眠っている人たち」と言っています。日本語では、「永遠の眠り」という言葉が死を意味する言葉として使われたりしますね。実は古代ギリシアや古代ローマにおいて、まさにそれと同じように使われていました。あるギリシア詩人は、「人は死ねば、復活はない。」と言いました。またローマの詩人は、「太陽は沈んで昇るが、我々は、つかのまの光が沈むと、終わりなき夜を迎えて眠る。」と言いました。¹だから、望みがないのです。日本の人たちに死について語れば、「そんなことは考えたくない」と言います。死後のいのちについては、確かな望みがないので考えたくない、ということなのかもしれません。そこでパウロは、テサロニケの人たちにもそのように考えてほしくないと言っています。

聖書において「眠っている」というのは、二つの意味があります。一つは、よみがえりです。「ダニ 12:2 ちりの大地の中に眠っている者のうち、多くの者が目を覚ます。ある者は永遠のいのちに、ある者は恥辱と、永遠の嫌悪に。」人が死んでも、よみがえるので、ちょうど眠っていても、それは目を覚まして起きるから、その状態が一時的であるように、死は永遠に続かない、一時的だということを使い表すために使います。ラザロのよみがえりの時に、イエス様が眠っているとわれらたら、弟子たちが、だったら問題ないと言ったら、イエス様は、はっきりとラザロが死んだと言われましたね(ヨハネ 11 章)。

そしてもう一つは、「休んでいる」ということです。この地上において、主にあつて労苦してきました。その労苦に報いて安息を得て、復活を待っている時に使っています。「ヘブル 4:10 神の安息に入る人は、神がご自分のわざを休まれたように、自分のわざを休むのです。」天に入ることを、自分のわざを休むと言っています。黙示録 6 章には、殉教者が休みなさいと言われている箇所があります。「6:9-11 子羊が第五の封印を解いたとき、私は、神のことばと、自分たちが立てた証しのゆえに殺された者たちのたましいが、祭壇の下にいるのを見た。彼らは大声で叫んだ。「聖なる

¹ “Suns may set and rise again but we, when once our brief light goes down, must sleep an endless night.” (Catullus)

まことの主よ。いつまでさばきを行わず、地に住む者たちに私たちの血の復讐をなさらないのですか。」すると、彼ら一人ひとりに白い衣が与えられた。そして、彼らのしもべ仲間で、彼らと同じように殺されようとしている兄弟たちの数が満ちるまで、もうしばらくの間、休んでいるように言い渡された。」最後の七年間の患難の時に殉教した人たちは、黙示録 20 章によると、イエス様が再臨された時によみがえります。その時までは白い衣が与えられて、休んでいます。みなさんが、キリストにあって先立たれた人々のことを考える時に、この二つのことをぜひ思い巡らしてください。

しかし、「眠っている」という言葉から、主にあって死んだ人は意識がなくなって、復活まで意識がないという教えがありますが、それは間違いです。今読んだように、復活する前の魂が天に明らかになって、意識があるように、死んだ後は天の中に入ります。パウロは、「私の願いは、世を去ってキリストとともにいることです。」と言いました(ピリピ 1:23)。世を去れば、そのまま、キリストとともにいます。そこに隙間はないのです。

では、世を去ってから、からだは復活するまでの間、どうなっているのか？という中間の状態について、議論があります。これは、聖書ではあまり明らかにされていません。からだを伴わない魂だけの状態であるかもしれません。あるいは、先ほど黙示録 6 章で白い衣が与えられるとあるように、その靈魂に一時的に、復活のからだとは異なる、なんらかのからだを与えられるのかもしれませんが、そこははっきりしていないのです。むしろ聖書にある希望は、この今のからだによみがえる、ということです。

¹⁴ イエスが死んで復活された、と私たちが信じているなら、神はまた同じように、イエスにあって眠った人たちを、イエスとともに連れて来られるはずで

私たちの復活の希望は、イエス様の復活に基づいています。私たちはキリストに結ばれている者です。イエス様が、ラザロの姉妹マルタに言われたように、この方を信じる者は、死んでも生きるのです。この方が復活の初穂となり、私たちが収穫物としてよみがえります。だから、コリント第一 15 章では、死者の復活がないと言っている者たちが教会にいたので、パウロが、「もし死者の復活がないとしたら、キリストもよみがえなかったでしょう。(15:13)」と言っているのです。千葉県我孫子に、ラザロ霊園というキリスト教系の墓地があります。その出入り口に十字架があり、そこには「復活の希望」と、その石に彫られています。すばらしいですね、私たちがキリスト者とお別れして、葬儀の棺桶を見ても、墓地に行っても、そこからよみがえるのだという希望を、しっかりと信仰によって抱かないといけません。

そして、「イエスとともに連れて来られるはず」と言っていますが、これは、彼らがイエス様に連れられて、神の前に連れて来られる、ということです。「マタ 10:32 ですから、だれでも人々の前でわたしを認めるなら、わたしも、天におられるわたしの父の前でその人を認めます。」順番を詳しく話

します。

第一に、キリストにあって死んだ人は、その霊は天におられる主の元にいます。

第二に、主が戻って来られます。天から降りて来られます。その時に、それら聖徒たちもキリストと共に来ます。「3:13 私たちの主イエスがご自分のすべての聖徒たちとともに来られる時に、私たちの父である神の御前で、聖であり、責められるところのない者としてくださいますように。」

第三に、16 節以降にあります。聖徒たちに復活のからだを与えられます。よみがえるのです。靈魂にからだを与えられるのです。

第四に、生き残っている私たちが、コリント第一 15 章によると、一瞬にして変えられて、聖徒たちと同じように栄光のからだに変えられて、空中で主と会います。

第五に、主とともに、先によみがえった聖徒たちと共に、一緒に天におられる父の前に、連れて来られるのです。

¹⁵ 私たちは主のことばによって、あなたがたに伝えます。生きている私たちは、主の来臨まで残っているなら、眠った人たちより先になることは決してありません。

これからパウロは、携挙についてのことを話します。そこにおいて、「主のことばによって、あなたがたに伝えます」と言っています。それだけパウロは、これは自分たちのことばではなく、はっきりと主がことばとして与えておられる、ということ語っているのです。だから、私もそのまま語ります。パウロが、自分の考えを退けて、そのまま主のことばを伝えているように、牧者また教師は、そのまま、パウロの語っていることを伝えなければいけないのです。

ここで、テサロニケの人たちが、どう考えていたのか？を説明します。パウロは、主が来られることしっかりと教えていました。そして彼らは、主が来られることを信じていた。けれども、主が来られる前に、すでに世を去って行った人々がいます。なので、主が来られる恵みに、彼らはあずかれないのか？として、悲しんだのです。それだけ、彼らは主が来られることを身近に信じていました。すぐにでも来ると信じていました。パウロが、そのように教えていたからです。

ここで新改訳 2017 は、とても恣意的な意識になっています。「主の来臨まで残っているなら」と言っています。けれども、この前の第三版以前でも、どの訳でも、そのように訳していません。例えば、共同訳では「主が来られる時まで生き残る私たちが」と言っています。パウロたちは、自分たちが生きている時に主が来られることを前提に語っています。他の使徒たちの手紙も、主が来られる時、生きているのを前提に書いています。例えばヤコブは、「5:8 あなたがたも耐え忍びなさい。心を強くしなさい。主が来られる時が近づいているからです。」と言っています。自分は生きていて、そのうちに主にお会いするという希望を、使徒たちは提供していたのです。「でも、使徒たちは主が来られるのを見ないで死んでいったではないか？これは預言が外れたのではないか？」という

疑問がある人がいます。そうではないのです、どの時代に生きる人であっても、自分が生きている時に主が来られるという希望と期待を抱きなさい、ということなのです。主の来臨が、それだけ身近なものとして生きて行くのが、神のみこころなのです。

テサロニケの人たちは、あまりにも身近になっていたのです、それで、先に死んで行ってしまった人が、主の来臨にあずかれないとまで考えてしまいました。彼らが知らなかったのは、主が来られる時に、眠っている人々はよみがえるということです。先ほど、ダニエル書 12 章 2 節を読みましたが、それは主が来られる時に人々がよみがえることです。イエス様が、この預言を意識してこう語られています。「ヨハ 5:28-29 このことに驚いてはなりません。墓の中にいる者がみな、子の声を聞く時が来るのです。そのとき、善を行った者はよみがえっていのちを受けるために、悪を行った者はよみがえってさばきを受けるために出て来ます。」

「眠った人たちより先になることは決してありません」と言っています。そうです、聖書によれば、まず、主が来られてよみがえる、という預言があるのです。旧約時代においては、メシアが来られることは先の話でした。しかし、新約になって、主が死んでよみがえられました。したがって、まだ生きている人々がいるところで主が来られるということも、十分に考えられるようになっているわけです。それで、主がパウロに、はっきりことばを与えられたのです。主が、来られる時によみがえりが起こるが、生き残っている私たちにも、その恵みにあずかれるようにしてくださっています。だから、まずは元々の約束である、聖徒たちのよみがえりが起こり、それから、生き残っている私たちがその出来事にあずかる、ということです。

2B 携挙 16-18

^{16a} すなわち、号令と御使いのかしらの声と神のラツパの響きとともに、主ご自身が天から下って来られます。

主は、「ご自身」が天から下って来られます。ここの「ご自身」のギリシア語はとても強く、「イエスご自身が戻られるのであり、他のだれでもない。」という意味があります。そうです、私たちをお迎えに来るのは、御使いでもだれでもなく、私たちの愛する主ご自身であります。王なる方が直接、そのしもべたちにお会いになりたい、というような思いです。

そして、「号令と御使いのかしらの声と神のラツパの響き」とあります。「号令」とは、命令のことです。何かを行なわせる時に声をかけることです。主は大声で、号令をかけられたことがありました。ラザロがよみがえった時に、「ラザロよ、出て来なさい。」と大声で呼びかけられましたね。黙示録でも、大声で聖所から呼びかける声が多く出てきますが、号令をかけられます。

次に、「御使いのかしらの声」とありますが、聖書にはミカエルがそれであることが書かれていま

す(ユダ9節)。ミカエルが、終わりの日にイスラエルのために戦い、救うために出てきます(ダニエル12:1)。同じように、教会のために主が来られる時も彼が関わる、ということです。

次に、「神のラッパの響き」です。神ご自身が聖徒たちを招集しておられる音です。ラッパは基本的に、遠くにいる民を呼び集める時に鳴らします。民数記10章にて、全会衆が会見の天幕に召集させる時にラッパを鳴らします。荒野の旅において、出発する時も鳴らしますし、戦う時も鳴らします。祭りの時にも鳴らします。つまり、ここでは神ご自身が、遠くにいる聖徒たちみなを、御子キリストのところに召集するようにラッパを鳴らすのです。

^{16b} そしてまず、キリストにある死者がよみがえり、¹⁷ それから、生き残っている私たちが、彼らと一緒に雲に包まれて引き上げられ、空中で主と会うのです。こうして私たちは、いつまでも主とともにいることとなります。

主が天から降りて来られる時に、先ほどから話しているように、まず起こることは、「キリストにある死者がよみがえり」ることです。それから、「生き残っている私たちが、彼らと一緒に雲に包まれて引き上げられ」ます。主が天に昇られる時に、「雲がイエスを包み、彼らの目には見えなくなった。」とあります(使徒1:9)。これは、空にある雲であったかもしれませんが、神の栄光のあるところは雲に満ちることが、シナイ山に主が天から降りて来られた時にありましたね。それから、幕屋や神殿にありましたので、神の栄光の雲なのかもしれません。その栄光の中にあずかります。

そして、彼らと一緒に「引き上げられ」とあります。ギリシア語で「ハルパゾー-ἀρπάζω。」という言葉で、「力づくで引き抜く」という意味があります。これと同じギリシア語が、使徒の働き23章10節で使われています。パウロがエルサレムで、ユダヤ人たちに殺されそうになったとき、ローマの千人隊長がパウロを引き出して牢屋に入れました。そして、ユダヤ人たちの議会の前にパウロが立ちました。パウロは、「私はパリサイ人であり、死者の復活の望みのことで、さばきを受けているのです。」と言いました。するとパリサイ人とサドカイ人との間に激しい論争が起こり、その論争ともつれ合いのなかで、パウロの体が引き裂けそうになりました。そこで千人隊長が、「パウロを彼らの中から引っ張り出し」とあります。ここのギリシア語が、ハルパゾーなのです。

そして、ここのテサロニケ人への第一の手紙にはないですが、コリント第一15章によりますと、「15:52 終わりのラッパとともに、たちまち、一瞬のうちに変えられます。」とあります。瞬きするような短い時間に、変えられます。死者はよみがえるのですが、生きている者たちは変えられて、栄光の姿を身にまとうのです。

そして、「空中で」とあります。聖書には、天は三つの種類が書かれていますが、パウロが一度、引き上げられたところの「第三の天」または「パラダイス」があります。これは、主が御座に着かれ

ているところの天です。そして、私たちがいつも目にしている大空があり、これも天です。そしてもう一つ、「空中」と書かれている天があります。ここには、あの悪魔や悪霊どももいるところで、第三の天でもなく、地上の天でもありません。その中間地帯であります。この第三の天から、空中にまで主が下って来られるのです。

私たちが引き上げられる目的は何ですか？「主と会う」ことです。ここの「会う」のギリシア語は、公に重要な人が町にやって来た時に、その町の人たちが通りに出て大歓迎するような様子を描いています。私たちが、空中にまで降りてこられたイエス様を主としてお迎えするということです。私たちは今、御霊によってイエス様を地上でお迎えして礼拝を献げますが、この時は空中でお迎えすのです。

この時はどれほど光栄に満ちていることでしょうか。パウロは、あの有名な愛の章で、こう言いました。「Ⅰコリ 13:12 今、私たちは鏡にぼんやり映るものを見ていますが、そのときには顔と顔を合わせて見ることになります。今、私は一部分しか知りませんが、そのときには、私が完全に知られているのと同じように、私も完全に知るようになります。」花婿なるキリストが花嫁である私たちに会ってくださるのです。そして「こうして私たちは、いつまでも主とともにいることになります。」と言っています。その時からずっと主とともにいることになります。今は、主はもうひとりの助け主、慰め主である聖霊によって励ましてくださっていますが、一緒になってからは決して離れることなく、ずっといっしょにいてくださるのです！

¹⁸ですから、これらのことばをもって互いに励まし合いなさい。

これが結論です。先に死んでしまった仲間のキリスト者たちのことを思って、悲しんでいたテサロニケの人たちに、主のことばを忠実にパウロは伝えて励ましました。私たちの生活は、地上にいる限り、いろいろなことが起こります。汚れが周囲に満ちています。だから聖なる者として生きます。互いに兄弟として愛し合います。仕事はしっかりとしていき、人々に品位を見せます。そして、先立たれる人々のことについては、慰め合うのです。